

高大連携事業における高大協働型授業づくり

～「追手門社会」での動画作成授業の導入～

追手門学院大学経営学部講師	宮崎 崇将
追手門学院中・高等学校教諭	木村耕太郎
追手門学院大手前中・高等学校教諭	尾西 悠史
追手門学院大手前中・高等学校教諭	東野 友洋
追手門学院大手前中・高等学校教諭	下司 恭平

1 はじめに

本稿では、2017年度「追手門社会」を取り上げて、追手門学院独自の高大連携の取り組みとしてその特徴を明らかにする。

高大連携とは、高校と大学が連携して行う教育活動のことであり、1999年の中教審答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」で本格的に提起されたものである。その目的は、生徒の学修履歴が多様化していく中で、高校生1人1人の能力や適性に対応しながら、高等教育機関である大学レベルの教育に触れる機会を提供することで高大接続を円滑化することである。具体的には、高校生が大学で授業を聴講したり、大学教員が高校に出向いて模擬授業や出前授業を行うというもので、非常に多岐にわたっている。

今日、高大連携の取り組みは普及しており、大学の学びを先取りし、イメージを豊富化することが期待できる一方で、その多くは大学の授業そのままか、もしくは内容を簡略化したもので、また単発であることが多い。それに対して、「追手門社会」は、1年間継続して授業が行われること、大学の既存の授業ではなく高校生向けの独自授業であること、それを高校教員と大学教員とが協働してつくっているという特徴がある。

以下では、まず「追手門社会」の経緯を紹介し、次に2017年度「追手門社会」の取り組みについて詳しく述べ、最後に生徒へのアンケートから「追手門社会」の成果と課題について述べる。

2 「追手門社会」の背景

2.1 「追手門社会」が始まった経緯

筆者らの所属する追手門学院は、1888年の小学校設立に端を発し、こども園から大学・大学院ま

でを有する総合学園である。追手門学院は、近年の学院を取り巻く環境の変化に対応するために、相互の連携を深め、教育の質を高めることで、さらに学院として魅力を高めるために連携が模索されるようになった。その取り組みのひとつが追手門社会である。

追手門社会は、2013年度に追手門学院の高大連携事業の一環として、原田哲次大手前高校校長（当時）と梶原晃追手門学院大学経営学部長（同）の間で話し合われ、計画されたものである。翌2014年度から葉山幹恭講師（現追手門学院大学地域創造学部講師）を担当者として、高校2、3年生を対象に、通常の授業と同様に週1回、通年での授業として開始された。

2. 2 動画作成の授業の導入

高校2年生向けの追手門社会の授業では、当初近隣商店街での店舗販売体験などが実施されていたが、内容の検討が求められていた。2016年度に葉山から引き継いだ宮崎と木村とで授業内容に関して、「基礎知識」、「思考力・判断力・表現力」、「主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ態度」という学力の3要素を伸ばし、高大で連携する独自の授業内容としてどのようなものがよいのか話し合いをした。そこで、木村から2年生向け授業での動画作成の提案があり、検討を経て導入することとなった。

動画作成を採用した理由としては、第一に、スマートフォンなどの発達により専門的な機器がなくとも一定の品質の写真や動画を撮影できるようになり、動画編集に関してもソフトウェアを利用することで容易にできるようになっており、比較的敷居が低く、生徒が取り組みやすいと考えたこと。第二に、動画には単一の答えがなく、たとえ同じ対象を選んだとしても個々人で異なるものができあがるということ。第三に、最近では、コンテストや就職活動で動画でのエントリーが増えるなど様々なシーンで動画の重要性が増していることが挙げられる。

以上のように、動画作成は大学で実施されていたものではなく、高校生向けに独自の授業であり、高校と大学の担当者とが話し合って形づくっていったものである。

3 2017年度の追手門社会

3. 1 授業の概要

実際の追手門社会の授業内容について詳しく述べる。

授業の目標は、①高大接続を意識して、大学での学びのイメージをつくる、②動画作成を通じて、自ら考え、表現する力を身につける、③アクティブラーニングを通して生徒自身が考え、計画を進める能力を身につける、④社会に対する関心を喚起する、である。

2017年度の授業は、毎週1コマが2クラスで合計週2コマであった。担当する教員は、高校教員が2名（尾西、東野）と大学教員が1名（宮崎）の3名で、それに加えて追手門学院大学経営学部宮崎ゼミ3回生2名（男女1名ずつ）がSA（スチューデント・アシスタント）として参加した

（写真１）。学生がSAとして参加したのは本年度が初めてであった。クラスは、普通科文系進学コースの２年生で、それぞれ27名（男子15名、女子12名）と26名（男子14名、女子12名）であった。

写真１ SAの学生



授業環境としては、主にPCルームを教室として使用した。動画編集のソフトウェアには、MicrosoftのWindowsムービーメーカー（以下、ムービーメーカーと略す）を使用した。ムービーメーカーを選択した理由としては、まず無料であることが挙げられる。およそ40台のPCにインストールするため有料のソフトウェアではコストがかかりすぎてしまうからである。機能面では、トリミングなど動画編集にとって必要最低限の機能が揃っており、初心者利用には十分である。また、生徒たちが使用したことのある同じMicrosoftのOffice系ソフトウェアとインターフェイスが類似しており、使用に関しての戸惑いが少ないことも理由として挙げられる¹。

授業の内容などに関しては、春学期中に高校で1時間程度のミーティングを2回ほど行って、高校教員と大学教員との間で話し合いをして、内容に関する議論や、役割分担、授業までの準備などについて決定した（写真２）。

¹ Microsoftによるムービーメーカーの提供はすでに終了している。

写真2 学期前の打ち合わせの風景



3. 2 1学期の取り組み

1学期の動画のテーマは、「自分たちが選んだテレビCMをコピーした動画を作成する」である。このテーマを設定した理由は、動画を作成するには、一般的にテーマの決定、企画の作成、絵コンテの作成、撮影の準備、撮影、編集といったプロセスをふむが、動画作成をしたことのない生徒たちが、限られた期間の中でいきなり1から自分たちでテーマを決定し、企画するのは難しいと考え、まずは動画作成の流れを理解し、撮影の仕方や動画編集ソフトの使用方法を学ぶことを主眼において、テレビCMをコピーすることから始めることにした。

表1は、1学期の授業の流れをまとめたものである。それぞれのおおまかな内容は下記のとおりである。

表1 1学期の流れ

回	授業テーマ
第1回	ガイダンス
第2回	動画編集ソフトの基礎、グループ分け
第3回	テーマ方針、CMの選定、撮影方針の策定
第4回	動画撮影①
第5回	動画撮影②
第6回	動画撮影③
第7回	動画編集①
第8回	動画編集②
第9回	全体発表会

出所) 筆者作成。

①ガイダンス

授業の目標や内容、スケジュールを説明した後で、春休み中に尾西、東野、下司の3名が協力して作成したテレビCMのコピー動画を披露して、生徒たちに動画作成のイメージづくりを行った(写真1)。

写真3 高校教員作成のテレビCMコピー動画



②動画編集ソフトのトレーニング

動画編集ソフトの使い方を学習するために、ガイダンスで利用した動画のデータを用いて、教員の説明に合わせてムービーメーカーを操作して、基本的な操作方法を学習した。

③動画撮影の準備

3～4人を目安に班に分かれて、YouTubeなどを利用して自分たちが模倣するテレビCMを決定した(表2)。決定したテレビCMを観察し、どのような役割や小道具が必要か、またいくつかのシーンで構成されているのか、などを生徒たちに考えさせた。それにそって、動画撮影の計画を作成した。

表2 1学期のテーマ一覧

クラス	班	テーマ
1組	1	YANMAR：サッカーCM「香川真司」篇
	2	セガ：ドリームキャスト「ウソだよー」篇
	3	エプリー：デリッシュキッチン「肉巻き半熟卵」
	4	ソフトバンク：「学割ってるダンス」篇
	5	UQコミュニケーションズ：UQモバイル「家族設定、誕生」篇
	6	ドコモ「初めてスマホ割」
	7	ポカリスエット
	8	ロッテ：Fit's
	9	BOOK OFF：「よむよむ君が行く『本を売る』」篇
	10	フリスク
2組	1	大塚製薬：ポカリスエット「ふたりで窓ふきを」篇
	2	リクルート：ホットペッパー「まだ伴奏」篇
	3	ドコモ：はじめてスマホ割「ケータイへの感謝」篇
	4	au：auガラホ「海の声」篇
	5	日本映画大学：「カメラを通して見ると別の見方になる」
	6	東進ハイスクール：「生徒への檄文」篇
	7	エプリー：デリッシュキッチン「生チョコ」
	8	ソフトバンク：「学割ってるダンス」篇

出所) 筆者作成

④動画撮影

班ごとに立案した計画にそって、教室やグラウンドなど高校の施設を利用して撮影した。撮影に際しては、撮影場所ごとに教員もしくはSAの大学生が付き添った。撮影は自分たちのスマートフォンを利用し、スマートフォンで利用できる三脚を教員が準備し、貸し出した。

⑤動画編集

自分たちで撮影した動画の素材をPCに取り込み、ムービーメーカーを使って編集した。データの保存のために班ごとにUSBメモリを配布し、それを使ってデータを保存、管理した²。授業の中で教員やSAの学生が回って、ソフトの使い方などに関する疑問に対応し、アドバイスを行った。BGMの音源については、曲名を提出してもらい、教員が準備した。

⑥全体発表会

1学期の最終回で動画発表会を開催した(写真2)。発表会は、追手門学院大学経営学部宮崎ゼミ2回生も参加して、高校生と大学生が合同で発表をした。原田章追手門学院大学経営学部長にも参加していただき、開会の挨拶とコメントをしていただいた。発表は、班ごとに自分たちがつくった動画を再生し、動画に関するプレゼンを1分程度行った。大学生は、高校生が2学期に取り組むテーマで動画を作成し、発表した。

² スマートフォンからデータを取り込む際に、ケーブルの不足や、不具合など非常に時間がかかった。

写真 4 1 学期全体発表会の様子



1 学期の成果として、まず、動画の撮影や編集の仕方などを学ぶことができたことがある。また、グループで話し合って計画を立て、その計画にそって進めていく経験をすることができた。さらに、自分たちで考え、表現の仕方を工夫したチームもみられた。

課題としては、教員側での進捗管理が十分ではなかったため未完成のグループができてしまったことが挙げられる。また、発表会に関して、発表会の緊張感が薄かった。これは、発表のみでコメントなどもなく、評価もないという発表形式と、発表会の会場の規模が非常に大きく、機材の不調で音が出ないなどの問題が重なったことでスムーズに進行できなかったことなどが原因として考えられ、二学期以降の課題となった。

3. 3 2 学期の取り組み

2 学期の動画のテーマは、「自分たちのおすすめの店舗・場所・地域をPRする」である。1 学期との違いは、①自分たちで対象、構成（流れ）などを決めなければならないということ、②撮影のタイミングなども自分たちで決めるということである。そのため、1 学期と比較して生徒たちの主体性や計画性が求められた

表 3 は、2 学期の授業の流れをまとめたものである。それぞれのおおまかな内容は下記のとおりである。

表3 2学期の流れ

回	授業テーマ
第1回	導入・グループ分け・テーマ設定
第2回	テーマ調べ①
第3回	テーマ調べ②
第4回	テーマ調べ③
第5回	テーマ調べ発表④
第6回	動画編集①
第7回	動画編集②
第8回	動画編集③
第9回	動画編集④
第10回	動画編集⑤
第11回	動画編集⑥
第12回	プレゼン練習
第13回	全体発表会

出所）筆者作成。

①ガイダンス

授業の目標や内容、1学期との違いなどを説明し、昨年度作成された動画を上映した。その後、3～4名を目安に班分けを行い、班ごとには話し合ってテーマや撮影日のスケジュールなどを決定した。班ごとのテーマは、表4のとおりである。

表4 2学期のテーマ一覧

クラス	班	人数	テーマ	
1組	1	3名	USJ	テーマパーク
	2	3名	グランフロント	商業施設
	3	3名	大阪ステーションシティ	商業施設
	4	3名	大阪城	史跡
	5	3名	USJ（ホラーナイト）	テーマパーク
	6	2名	インスタントラーメン発明記念館	企業博物館
	7	3名	USJ	テーマパーク
	8	2名	USJ（ミニオンパーク）	テーマパーク
	9	3名	東映太秦映画村	テーマパーク
	10	3名	IKEA	商業施設
2組	1	3名	なんばパークス	商業施設
	2	3名	ダスキンミュージアム	企業博物館
	3	2名	道頓堀	商店街
	4	2名	雀・つけめん	飲食店
	5	3名	ヒステリックジャム（クレープ）	飲食店
	6	2名	コリアンタウン	商店街
	7	2名	若江岩田	地域
	8	4名	R.J.カフェ	飲食店
	9	2名	大阪城	史跡
	10	3名	ヨドバシ梅田	商業施設

出所）筆者作成。

②テーマ調べ

授業時間外に自分たちで動画を撮影するために一定の期間が必要であることや、撮影に際して対象となるものについて知識が必要であるため、最初の一ヶ月程度、テーマについてスマートフォンなどを使って対象となる場所の基本的なデータ（位置、アクセス方法、取り扱っている商品やサービスなど）を調べて、内容をまとめて模造紙を使って発表した。

③動画編集

自分たちで撮影してきた動画の素材を使って、ムービーメーカーで動画編集を行った。1学期と同様に、各班にUSBメモリを配布し、そこに動画を保存して、管理した。BGMの音源については、曲名を提出してもらい、教員が準備した。

④プレゼンの準備

1学期の反省から、全体発表会でプレゼンするための原稿を予め作成させ、プレゼンの練習を行った。

⑤全体発表会

2学期の最終回で、2クラス合同の動画発表会を実施した。発表会はコンテスト形式を採用し、原田章経営学部長とSAの大学生2名の3名を審査員として、動画の出来映えとプレゼンの合計点数で採点した。最優秀賞として1班にQUOカード一人1000円分、優秀賞として4班にQUOカード一人500円分を贈呈した。発表は、動画の上映中もしくは上映後に動画のテーマや工夫した点などについてプレゼンを行い、それに対して審査員1名がコメントする形で進めた。

写真5 2学期全体発表会の様子

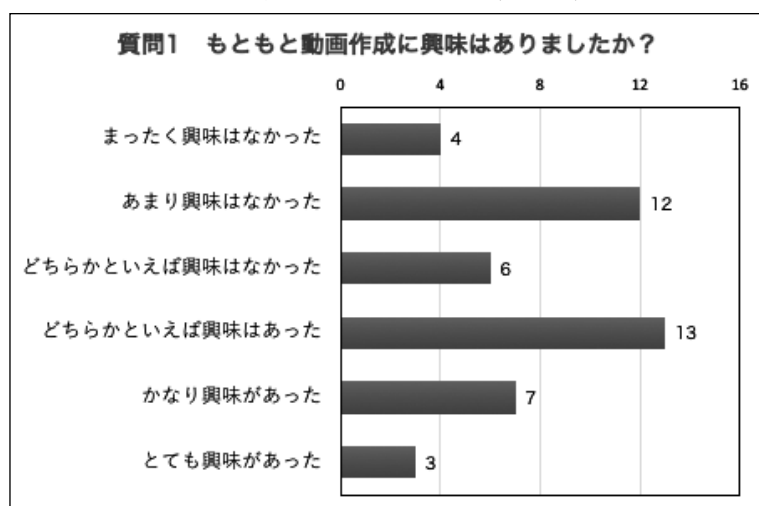


4 成果と課題

2学期末の動画発表会の最後にアンケート（資料1）を実施した。回答数は45名で、女子22人、男子23名であった。このアンケートの結果に基づき、授業の成果と課題について述べる。

順番にデータをみていくと、まず質問1「もともと動画作成に興味はありましたか？」に関して、「どちらかといえば興味はあった」（13名）、「あまり興味はなかった」（12名）というように、動画作成への興味の有無に関しては、目立った特徴は見られなかった（図1）。スマートフォンやSNSの普及で写真や動画の撮影は一般的になっているが生徒たちは動画作成に特別に関心をもっているわけではなさそうである。

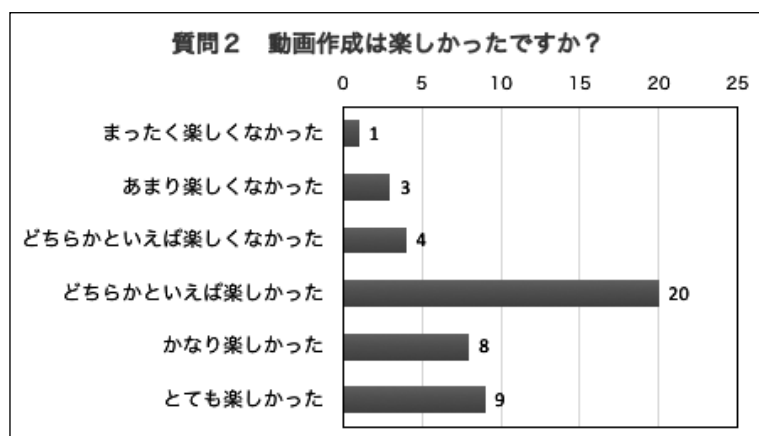
図1 質問1に対する回答（n=45）



出所) アンケートを集計したデータをもとに作成した。

質問2「動画作成は楽しかったですか?」に関しては、「どちらかといえば楽しかった」(20名)が突出して多く、「どちらかと言えば楽しかった」から「とても楽しかった」までを合計すると37名となり、8割の生徒が楽しかったと感じたようであり、満足度は高かったといえる(図2)。

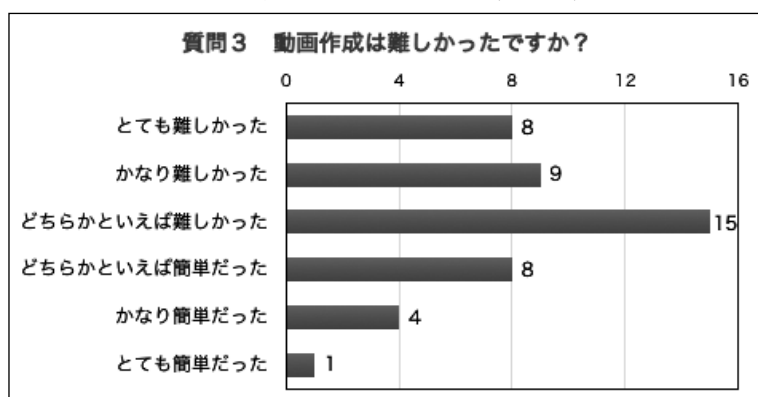
図2 質問2に対する回答（n=45）



出所) 図1と同じ。

質問3「動画作成は難しかったですか?」に対して、「どちらかといえば難しかった」(15名)が一番多く、「かなり難しかった」(9名)、「とても難しかった」(8名)も数が多かったため、授業で実施した動画作成は生徒にとって難しかったようである(図3)。

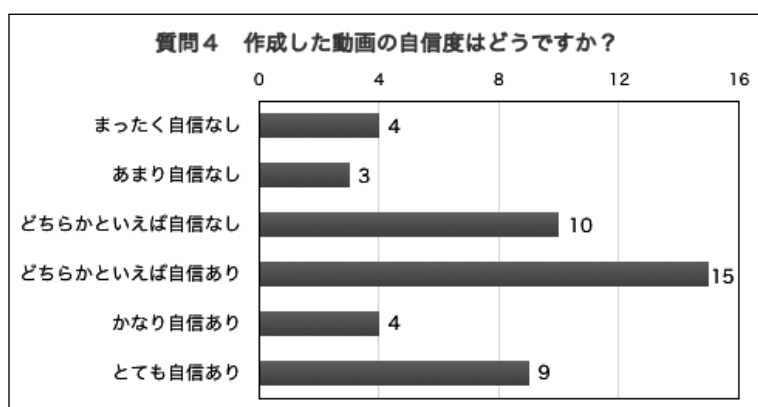
図3 質問3に対する回答（n=45）



出所) 図1と同じ。

質問4「作成した動画の自信度はどうですか？」に関しては、「どちらかといえば自信あり」（15名）と「どちらかといえば自信なし」（10名）と明確な評価を。その一方で「とても自信あり」（9名）と明確な自信をみせる生徒たちも多かった（図4）。

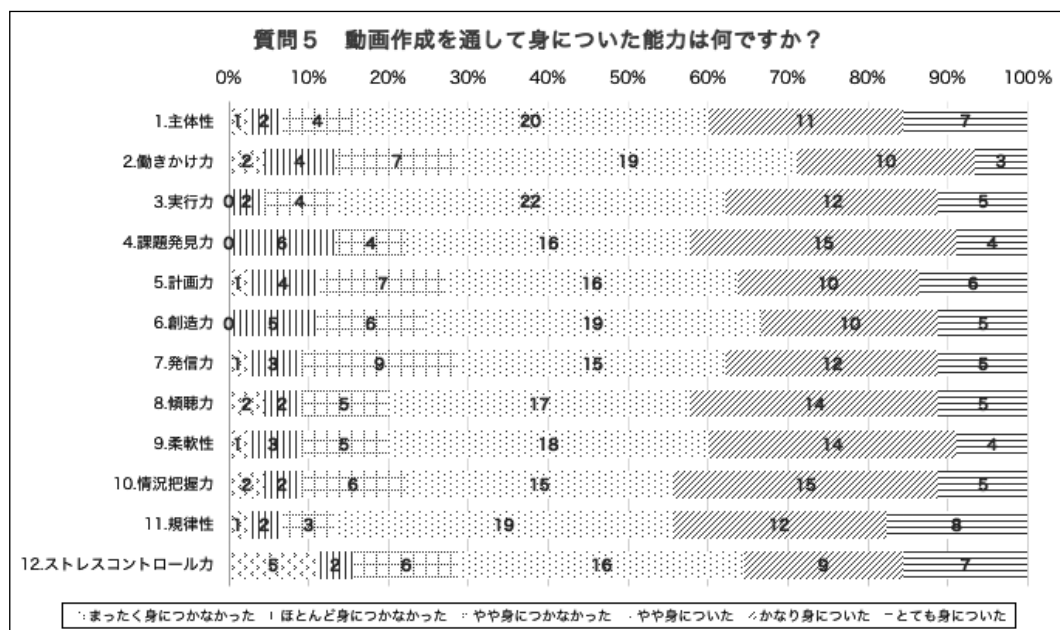
図4 質問4に対する回答（n=45）



出所) 図1と同じ。

質問5「動画作成を通して身についた能力は何ですか？」に関して、「やや身についた」から「とても身についた」までの肯定的な評価が多かったのは、「主体性」、「実行力」、「規律性」といった項目である（図5）。それに対して、「働きかけ力」、「発信力」、「ストレスコントロール力」などの項目が相対的に否定的な評価が多かった。

図5 質問5に対する回答 (n=45)



出所) 図1と同じ。

以上のように、スマートフォンによる写真や動画の撮影が一般化している一方で、必ずしも生徒の動画作成に関する関心は高くなかった。また動画作成を難しいという生徒も多かった。しかし、授業を通じて満足感を得ているようである。また、総じて授業を通じて能力形成に実感を感じている生徒も多かったといえる。ただし、目標とする計画力などの点で評価が低く、改善の余地があるといえる。

アンケート以外では、SAの大学生と打ち解けて話しをする生徒が多く見られ、普段接する機会の少ない大学生を知るよい機会となっていたと考える。

授業のより技術的な課題としては、取り組みに班ごとの温度差があり、いかにしてこの差を縮めるのかということがある。また、スマートフォンの利用に関して、授業中にSNSなど目的外的利用も散見され、利用の管理についてさらに改善が必要であると感じた。

5 おわりに

ここまで述べてきたとおり、「追手門社会」は、2年生向け授業として、大学の既存の授業ではなく高校生向けに独自に動画作成の授業を、高校教員と大学教員とが協働して1年間継続して実施している。アンケートの結果をみると、生徒にとって満足度は比較的高く、「思考力・判断力・表現力」といった学力の形成に一定寄与しているといっていよう。さらに、2017年度は大学生と

身近に接する機会をつくることができ、具体的な大学生像を豊富化させることもできた。追手門学院が掲げる「教えあい、学びあい」の1つの姿であるといえる。

「追手門社会」は、単に1授業の教育効果だけには止まらず、高大間の関係性が深まったことも成果として挙げられる。学期の始めと終わりに複数回のミーティングを実施するなど、担当教員同士の意見交流は非常にスムーズになっている。さらに、宮崎と木村とは、この取り組みをきっかけに新たな取り組みとして追手門学院中・高等学校で宮崎ゼミの学生が大学で学んだ内容で出前授業をする「co-otemon class」を始めている。

最後に、「追手門社会」は独自の取り組みということで高校教員、大学教員相互に様々な準備などが必要であった。高校、大学のそれぞれの教職員の理解を得られることで進めることができたが、そのような学校からの支持がこのような取り組みを進めていく上では不可欠であり、支持を得るためにもこまめに情報発信することで周囲の理解を得ることが重要である。

謝 辞

本講義の実施にあたり、追手門学院大学経営学部部長 原田章教授、同一貫連携教育部長 小野浩児教授および追手門学院大手前中高等学校教頭 福田哲也先生には、ひとかたならぬご高配・ご支援をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。

資料 1

追手門社会アンケート2017年度

名前

性別

1. 女性
2. 男性

以下の質問の答えで当てはまるものの数字に○をしてください。

質問 1 もともと動画作成に興味はありましたか？

1. まったく興味はなかった
2. あまり興味はなかった
3. どちらかといえば興味はなかった
4. どちらかといえば興味はあった
5. かなり興味があった
6. とても興味があった

質問 2 動画作成は楽しかったですか？

1. まったく楽しくなかった
2. あまり楽しくなかった
3. どちらかといえば楽しくなかった
4. どちらかといえば楽しかった
5. かなり楽しかった
6. とても楽しかった

質問 3 動画作成は難しかったですか？

1. とても難しかった
2. かなり難しかった
3. どちらかといえば難しかった
4. どちらかといえば簡単だった
5. かなり簡単だった
6. とても簡単だった

質問4 作成した動画の自信度はどうですか？

1. まったく自信なし
2. あまり自信なし
3. どちらかといえば自信なし
4. どちらかといえば自信あり
5. かなり自信あり
6. とても自信あり

質問5 動画作成を通して身についた能力は何ですか？

		まったく身につかなかった	ほとんど身につかなかった	やや身につかなかった	やや身についた	かなり身についた	とても身についた
1. 主体性	物事に進んで取り組む力	1	2	3	4	5	6
2. 働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力	1	2	3	4	5	6
3. 実行力	目的を設定し確実に行動する力	1	2	3	4	5	6
4. 課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力	1	2	3	4	5	6
5. 計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	1	2	3	4	5	6
6. 創造力	新しい価値を生み出す力	1	2	3	4	5	6
7. 発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力	1	2	3	4	5	6
8. 傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力	1	2	3	4	5	6
9. 柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力	1	2	3	4	5	6
10. 状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	1	2	3	4	5	6
11. 規律性	社会のルールや人との約束を守る力	1	2	3	4	5	6
12. ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力	1	2	3	4	5	6